

がでがる寸劇編 1

がでがる寸劇編 1 キャスト・オフ!



著：紗月堂主人

イラスト：紗月

キャスト・オフ！

著者：紗月堂主人

イラスト：紗月

===

1 放熱効果を上げよ！



「くっ！このモンスター強い！」
道中出くわしたモンスターを目の前にして、紗月は唸《うな》った。そのモンスターは、急に、がでがる達の目の前に現れたのだ。

「体温が、異常に高いわ！下手に近づくと、やけどするレベル！」
紗月がメガネを押し上げながら分析する。

「燃えているの！？じゃあ、水をぶっかければ？」ルナは水筒の水をかけようとした。

「だめだ！水蒸気爆発を起こしてしまう！！」と、ひげさんが叫ぶ。

（ひげさん、さすが、元理科教師だけのことはある。そのときの記憶は覚えている？それとも偶然・・・）ひげさんの理科教師だったときの記憶が、いつか私たちを救うことがあるはずだと、ティルスは心の中で思った。

「ティルス、何か詠唱できる魔法ないか？ティルス？」

ひげさんの呼びかけにすぐに反応できなかった。そうだ、何か魔法があるはず・・・。ティルスが迷っていると、紗月が叫んだ。

「前に見せてもらったのがあったよね。物体を冷凍化させるやつ。あれ使えない？」
そうだ。あの魔法だ。さすが、紗月は冷静だ。ちょっと混乱してしまった。私らしくない・・・。

ティルスが悩んでいる間、ルナはモンスターとの距離を保ちつつ、ルナパンチでモンスターに波動を与えて時間稼ぎをしていた。が、それも長くは続きそうもない。ひげさんは後方支援している。

「・・・青き光の守護の力を借りて、ここに詠唱する。アクアス、ガラドリエリアン、・・・」

魔法は効き始めている。が、思ったような効果がない。紗月は、ストームブリンガーを大きく構える。

「脱ぐわ！」ティルスが叫ぶ。

「?!」

「今からちょっと強い魔法を詠唱します。この魔法は、胸のあたりを中心に体が熱くなってしまう。服を脱いで、放熱効果を上げます！」



「熱暴走が起きるってこと？」と紗月。
「そう、魔力の制御がうまくいかないと、自分ごと燃えちゃうから！」ティルスはローブを脱ぎ、白と青のノースリーブドレス姿になる。胸元が開いたその装いから、魔力の光が淡く立ちのぼった。

「よし、ティルス、お願い！こっちの支援は任せて！」紗月はストームブリンガーの刃先を地に突き立て、熱の逃げ道を作るように魔力を分散させる。

「ルナ、もう少しだけ耐えて！」「うん！ルナパンチ改・波動三連！！」モンスターがたじろぎ、わずかな隙が生まれる。

「行くわー！」ティルスの詠唱が完成する。

「氷の理よ、命の奔流を鎮めよ……《グラシエル・ネレイス》！！」

ティルスの足元から花卉のような氷晶が舞い上がり、空気が静かに震える。真っ白な冷気が周囲に渦巻き、モンスターの燃え盛る体を包み込むー！

そしてー「**放熱、完了。**」

モンスターは凍てついたまま、崩れるように地に伏した。

「……ふう。ちょっと、暑かったわ」ティルスが額の汗をぬぐいながら微笑むと、ひげさんがポツリと。

「ティルス、脱いでもすごいな！」

「……どこ見てんですか！」

「えっ、あっ、その、いや、その魔力の光が……」

「うっわ～、めっちゃ動揺してる～（笑）」とルナ。「ひげさん、アウト～！！」と紗月とルナの声がハモった。

三人のツッコミが、森の奥まで響いたー。

===

2私も脱ぐ！

「いや～、それにしてもさっきのティルスの魔法は凄かったな～」
ひげさんは、何かを思い出してニヤニヤしながらつぶやいた。

「何思い出してんですか？」

やれやれといった雰囲気、紗月が突っ込む。

「なあ、ティルス。やっぱり服を脱いだ方が、詠唱するにはいいのか？」

「時と場合によります。さっきのモンスターには、より強い魔法が必要でした。それを発動させるための詠唱に、たまたま体が熱くなるという副作用があったからです。」

「と、言うことは、毎回脱ぐわけではない、ってことか・・・」

「その通りです」

「そうか〜、ざ」

「残念ですか？」紗月が、突っ込む。ここまで黙って聞いていた紗月だが、どうにも我慢ができなくなってきたようだ。いったい、ひげさんはどこを見ているんだか！

「いやいや、残念・・・じゃなくて」ひげさんが慌てて答える。

「ざ・・・、の続きは何だったんだろね（笑）」ルナがとぼけて言う。

「・・・ザネリだ！」苦し紛れ《まぎ》れに、ひげさんが言う。

紗月「ザネリ？まさかの『銀河鉄道の夜』？」

「そうだ、ザネリ」

ルナ「いや、それ、言い訳にもならない（笑）」

ティルス「『ラッコの上着が来るよ』ってやつでしたよね」

ひげさん「そうそう。私は、ますむらひろしバージョンのアニメ映画が好きだったんだよね〜」

苦し紛れに発した言葉によって、運良く、何とか話題をそらせることに成功したかに見えるひげさんであった。

紗月「・・・ええい、もう訳分からない！私も脱ぐ！」

紗月としては、ティルスに傾きつつあるひげさんの気持ちを自分に向けようと必死。だからといって、脱がなくてもいいような気もするが、女心は難しいものである。

ひげさん「どうせなら、2人っきりの時に・・・」

ルナ「うひゃ〜。聞いちゃいけないやつ〜（笑）。刺激強すぎ！」

か〜っ、ワルノリして言い過ぎたかも！紗月は顔を真っ赤にする。

ティルス「もー、何やってんですか！」

「私の場合は、魔法の詠唱の効果を上げるために、仕方なく服を脱いで体からの熱を放熱させているだけなんです。熱暴走を防がないと、自分自身が危ないんです」

まあ、それは理屈になっている。ティルスが服を脱ぐのには必要性が見られる。そんなことは、紗月もひげさんもルナも理解している。

ただ、理屈だけではないのである。それが人間の心理と言うものだ。

「ちょっと、ワルノリしすぎてごめん」と紗月。

そこで何を思ったか、ひげさんが妙なことを口にし出した。

「紗月、おまえは脱がなくて良い。ルナもだ。必要性がないからな。と、言ってティルスだけに服を脱がせるのも実に！忍《しの》びない。」

紗月、ティルス、ルナ「ん？」

ひげさん「だから・・・」

紗月、ティルス、ルナ「だから・・・？」

ひげさん「私も脱ぐ！」

紗月、ティルス、ルナ「あんたかい！！（笑）」

ひげさん「タイトル回収だな！（笑）」

===

3キャスト・オフ！

またまた、モンスターが現れた。さっきのより、ちょっと大きい。

ひげさん「ティルス、魔法を頼む！」

分かっています！と無言でうなづくティルス。

「古の名前に誓って・・・」

紗月は、ロングソードを構える。

ルナも、両こぶしに力を入れる！



ティルスの様子がおかしい。どうやら、魔法の効きが悪いようだ。詠唱の効果が十分ではないのか。体が熱暴走をしそうなのか。ひげさんは思った。ここは、ティルスに服を脱いでもらわないと……。

「ティルス！服を脱げ！」

「イヤです！！」とティルス。

「だめです！！」と紗月。

「いやらし～（笑）」とルナ。

おいおい、それじゃやられちゃうよ～。そうだ！言い方を変えてみよう！

「ティルス！キャスト・オフ！」

「キャスト・オフ?!」

「そうだ。固い殻を突き破るという意味だ。かつて、サナギマンがイナズマンに2段階変身したように、かつて、仮面ライダーカブトが超高速で動くために堅い鎧を脱いだように！

ティルス、キャスト・オフだ！」

「なんだか分からないけど、説得力ある！分かりました。

キャスト・オフ！！！！」



(脱いだ！ 言い方を変えたのはいいアイデアだったな)

「ひ・げ・さ・ん」

紗月とルナの視線に気が付くのは、このあとすぐのことであった。

===

4 温泉でキャスト・オフ！

「キャストオフ・・・ねえ」

まあ、ひげさんのアイデアは悪くないわね。確かに、高速で動く敵に対しては、間違いなく効果がある。ひげさんのいやらしい思考が役立つこともあるんだ。

「今、“いやらしい思考”って言ってた？」と、ひげさん。

「え？」（心の声がダダ漏れしちゃった？）

「“いやらしい思考”ってのは聞き捨てならないな～。そんな気持ちで言ったわけではないぞ。あくまでも、戦闘能力をアップさせたいと強く願ってだな・・・」

やれやれ、言い訳にしか聞こえない（笑）

「でも、実際、戦闘能力はアップしたろ。ティルスが魔法詠唱の際に発生させてしまう体内部からの熱はうまいこと放熱できたし、紗月だって身軽になって攻撃が速くなった。ルナに至っては、服が軽くなったおかげで前進のひねりが利くようになってパンチの威力は私の見立てだと5倍にアップしてるぞ」

ううむ、確かに・・・。と、紗月。

「だから、ほれ、キャストオフ・・・」

「なに、耳元で小声で言ってんですか！」

「周りには誰もいないぞ。気にすることはない。紗月、ほれ、キャストオフ！」

その瞬間、ひげさんの後頭部に、

ドーン！！！！ルナパンチ炸裂である。

「いてっ！ なんだルナか」

「なんじゃないですよ。ひげさん、なにやってんすか！紗月さん困ってるじゃないですか！」

（あ～、もう一押ししてくれれば、キャストオフしなくてもなかったのに～、ルナ～、空気読め～）

まさかの紗月である。

そんなこんなで、がでがるの3人とひげさんは戦いの疲れをとろうと温泉に来たのであった。

先ほどの戦いで、体のあちらこちらに傷を作ってしまった。温泉に浸かって、ゆっくり静養しようということになったのだ。

「“森の | 出《い》で湯”か・・・」

温泉の入り口に掲げられている看板には、温泉の効能らしきものを書いてある。

「なになに・・・、う～ん、読めないな。ティルス、これルーン文字？」

「そうですね。ルーン文字に似ているけど、ちょっと違うみたいです。その昔、日本という国で使われていたカタカナに似てますね。」

「で、意味は分からないか？」

「意味は分かりませんが、読めます。“コンヨク”って書いてあります」

「混浴ってこと？」ルナが調子に乗って叫ぶ。

「その混浴かしら？」紗月は | 怪訝《けげん》そんな顔をしている。

ひげさんは、誇ったように「温泉を前にして“コンヨク”って言ったら“混浴”しかないだろ（笑）」

「ひげさん、なんか目がぎらぎらしてない？」

「そうだよね」

「これは、まずい流れです」

3人の思いを知らずか、ひげさんはこう叫ぶのであった！

「一緒に温泉に入るぞ！それ、みんなでキャストオフ！！！！！」

「・・・するわけありません！！」

「・・・するわけありません！！」

「・・・するわけありません！！」

ヒエックシュ、寒・・・。

ひげさんが、風邪を引いたのは当然のことである。

「さ、ひげさんは風邪引いちゃったから、私たちだけで入りましょう！！！」

「せーのっ！」

「キャストオ～フ！！！」

ドッポーン！！

温泉にダイブした、がでがる3人娘であった。

「きゃー、紗月さん、胸大き～い！！」

「ルナも意外と・・・」

「ティルス、その胸、反則（笑）」

ああ、混浴温泉に日は暮れる・・・。

===

5宿にて

3人とひげさんは、宿に戻ってきた。

「今度こそ、本当にゆっくりできそうだな」

3人に振られて（まあ、当然だが）、1人だけ温泉に入れず風邪を引いてしまったひげさんだったが、ティルスの回復魔法によって、もう元気になっている。

「今日はみんな頑張ったし、いやらしい目でおまえ達を見てしまった謝罪の意味も込めて・・・、思う存分好きなだけ食ってくれ。酒もいくらでも飲んでいいぞ」

「やった～」

「酒飲んで、体が熱くなって、服のボタンを外したくなっちゃう・・・って期待してません？」

(む、ばれた?)

「ははは、まさか〜、ははは」

「ひげさん、顔がひきつってますよ」

紗月、シャツの胸元に手を伸ばし、ボタンをしっかりと留めようとして一言。

「キャストオン!!!」

「うわ、紗月さんの防御力上がった(笑)」

「ボタン一つが、魔法の効果に相当するようです。さすが、紗月さん」

「キャストオフじゃないのね・・・」

ひげさんの嘆きが、食堂に寂しく響いたのであった。

(また今度ね、ひげさん!)



寸劇編1 「キャストオフ！」 完

===

あとがき

読者の皆様，寸劇編1キャスト・オフ！をお届けしました。読んでいただき，ありがとうございました。

先日上梓した「イラスト集ルナ編」が，令和7年5月28日付けで，イラスト部門第1位，SF・ファンタジー部門で第5位という快挙を達成しました。読者の皆様，本当にありがとうございます。まさか，イラスト部門で第1位を達成するとは思っていませんでしたので，素直に嬉しいです。SF・ファンタジー部門でも第5位ですから，これはもう皆様のおかげとしか言いようがありません。本当にありがとうございます。

がでがる（ガーディアン・ガールズ）を主役とした小説，イラストは，ChatGPTplusを使って作成しています。生成AIとの協働作業です。これからも，がでがるの活躍にご期待ください。

ぜひ，感想をコメントに残してください。創作の励みになります。今後ともよろしくお願ひいたします。